

ジェイコブ・H・シフと日露戦争

—アメリカのユダヤ人銀行家はなぜ日本を助けたか—

二村宮國

〈目次〉

はじめに

I、日露戦争と外債

- (1) 明治政府の外債非募集政策
- (2) 日露戦争の戦費の規模
- (3) 高橋是清の外債募集交渉
 - a) ロンドン金融市場と高橋
 - b) シフとの出会い

II、シフと日露戦争

- (1) シフの意図
 - イ. 経済的動機
 - ロ. 政治的動機

(2) 日露戦争後のシフと日本

III、アメリカのユダヤ人リーダー

- (1) シフとクーン・ロエブ商会
- (2) ユダヤ人ネットワーク
- (3) ユダヤ人移民支援と慈善事業
- (4) 帝政ロシアのユダヤ人迫害への抗議活動

おわりに

はじめに

100年前の日露戦争における日本の勝利は、アメリカのセオドア・ルーズヴェルト大統領（当時）の仲介とウォール街のユダヤ人金融業者ジェイコブ・ヘンリー・シフの金融面での対日協力なしにはありえなかった。本稿は、シフの日本に対する金融支援に焦点を絞って考察する。開戦直後から日本政府の特派財務委員として当時の世界の金融センター、ロンドンで戦費調達交渉に心をくだいた高橋是清は、のちに、自伝の中でロンドンでのシフとの「偶然の」「仕合せ」な出会いに触れ、「私は一にこれ天佑なりとして大いに喜んだ¹⁾」と記した。高橋が交渉に入った1904年春以降の戦況の好転も幸いしたが、シフの日本外債引き受け参加が、その後の日本外債の順調な売り出しに決定的ともいえる影響を与えたことは明らかである。日本政府は、シフの支援を多としてロシアとの講和成立後、シフを日本に招待し、勲章を与えるなど、感謝の意を示した。では、なぜ、シフは日本を支援したか。

近年、シフの原資料に基づく研究が米国やイスラエルでも進んできた。それらの研究は、シフの対日支援動機に、帝政ロシアに打撃を与えユダヤ人政策見直しへの道を開かせようとする戦略、深慮遠望があるのとともに、新興国との金融取引は収益をあげる絶好のチャンスとのビジネス面での判断も働いたことを明らかにした。ビジネスと信念—この二つが有機的に働き、シフは動いたのである。日本の勝利は、シフのビジネスマンとしての成功をもたらしただけでなく国際ユダヤ人社会のリーダーとしての名声をも確立することになった。

以下、まず、日本が日露戦争を戦いぬくためには、外国資本導入に依存せざるをえなかった事情と高橋是清の外債交渉を概観し、ついでナオミ W. コーエンの研究に大きく依りながら、ビジネスと信念を同時に追い求めたシフの実像を明らかにする。

I、日露戦争と外債

(1) 明治財政と外債非募集政策

「明治の大業、事業の大半を国債に依り之を經營したり³⁾」といわれるように維新政府の国家財政は日露戦争に至るまで国債に大きく依存していた。日露戦争の2年前、1902(明治35)年の国債残高は8億5700万円で国家予算の約4倍に膨れ上がっていた。1894(明治27)年初、開戦の日清戦争は、臨時軍事費等総計2億5000万円で、日銀借入と国内での「軍事公債」募集により財源が賄われたため、国債残高が膨れ上がる一因となった。しかし、外債発行は行われていない。明治政府は膨れ上がる債務を放置していたわけではなかった。すでに1886(明治19)年10月、国債整理のため、整理公債条例を發布し、「高利公債を償還して国庫の費用を減らし、民庶の負担を軽くす」ることを図っていた。

一方、外債発行についてはさらに慎重だった。明治政府は明治初年から日清戦争後までは外債は募集しない外債非募集政策をとってきた。これは「明治の政治家が外国資本の侵略的意図に対して反発を感じ、極端なまでの外債忌避の態度をとったこと⁴⁾」があると考えられる。明治政府の外債発行について見ると、第1号は1868(明治元)年7月、英国の東洋銀行から洋銀50万ドルを借り入れたケースであった。これは幕府が横須賀横浜製鉄所を抵当として仏ソシエテジェネラル銀行より1868(慶応4)年2月借入れた負債を償却するためであったが、年15%という、とてつもない高利であった。今日のように公債証書を発行して一般から募集する外債の第1号は1870(明治3)年4月、ロンドンで募集した九分利付国債(起債額488万円)で、京浜・阪神間の鉄道敷設費に当てるとされたが、これも高利は明らかであった。以下、①1873(明治6)年1月、七分利付外債起債(士族への就業資金給付、起債額1171万円)、②1897(明治30)年6月、預金部保有軍事公債(4300万円)のロンドンでの売り出し、③1899(明治32)年、第一回四分利付英貨公債起債(募集額1000万ポンド)と続くが、3件にとどまっている。1899年の英貨公債発行は高橋是清が交渉する日露戦費の

外債発行に先立つものだが、輸入増大による国際収支悪化、国内金融逼迫のため鉄道公債、北海道鉄道公債の代わりとして外債の発行に踏切り加藤高明公使が交渉に当たった。発行条件は、年利率4%、発行価格90ポンド（額面100ポンド、政府手取86ポンド）という日本にとっては屈辱的なものであったにもかかわらず、応募は低調で実収金860万ポンドにとどまるという惨々の成績に終わっている。

(2) 日露戦争の戦費の規模

日露戦争は1904（明治37）年2月より翌1905（明治38）年9月にポーツマス講和条約が調印されるまで1年7ヵ月戦われ日本が勝利した。この戦争は近代日本としては初めて「真に国力を傾注した戦争⁵⁾」であった。その財政的負担も当時の日本経済にとっては、きわめて大きいものであった。

日露戦争の戦費支出は、1903（明治36）年12月に始まった。日露関係の外交的危機に対応して軍備充実を急ぐために、政府は1億5000余万円の財政支出権限を得ている。開戦直後、1904（明治37）年3月に第20回帝国議会が召集され、臨時軍事費3億8000万円、各省臨時事件費4000万円の第1次予算が認められた。臨時軍事費は陸軍省、海軍省が支出する直接経費であり、その他に各省が臨時事件費として戦争関連支出を行っている。戦費予算はさらに膨れていく。1904（明治37）年11月の第21回帝国議会で臨時軍事費7億円、各省臨時事件費8000万円の予算が成立、また、講和条約成立後の1905（明治38）年12月の第22回議会議では、4億5045万円、各省臨時事件費9170万円の予算が計上され、総計では（表1）のように臨時軍事費17億4642万余円、各省臨時事件費2億3970万余円、合計19億8612万余円に上った。臨時軍事費は特別会計として計上されたが、これを当時の歳出予算額（一般会計）、1904（明治37）年度2億2318万余円と比べると、その規模は8.9倍、つまり約9年分の国家予算に比敵する膨大なものだった。その財源は歳計余剰金をあてるのはもちろん、国民に献金を訴え、大幅な増税も試みたが、大部分を内外公債募集と日本銀行からの一時借入金で充てようとした。このうち、臨時軍事費は14億9242万円を内外公債募集

と日銀借入れで賄おうというもので、その比率は85.46%にも上った。

この戦費を日清戦争と比べる(表2、表3)と、戦争継続期間が19ヵ月と長かったこともあり、臨時軍事費(特別会計分)のみを見ても日露戦費は約7倍と高いものになった。鈴木武雄(1962)は戦費の中で物件費、特に兵器費の割合が日露戦争で高まっていることに注目、「戦費の経済に及

(第1表) 日露戦争の戦費予算

(単位 千円)

項 目	臨時軍事費	各省 臨時事件費	合 計
1903年度予算外支出費	-	1,423	1,423
1903年度勅令第291号による支出費	155,971	258	156,229
第 1 次 予 算 額	380,000	40,000	420,000
第 2 次 予 算 額	700,000	87,200	787,200
1905年12月予算外支出額	60,000	28,825	88,825
第 3 次 予 算 額	450,450	82,000	532,450
合 計	1,746,421	239,706	1,986,127

(参考)『明治大正財政史』第1巻、228～229ページ

この表の臨時軍事費予算のうち、第1次予算は第20回帝国議会、第2次予算は第21回帝国議会、第3次予算は第22回帝国議会においてそれぞれ協賛を得た額を示す。各省臨時事件費については、第1次予算は1904年度、第2次予算は1905年度、第3次予算は1906年度において成立した額(予算外支出額を除く)を示す。

(出所)鈴木武雄『財政史』83頁。

(第2表) 日清・日露両戦争の
戦費支出(決算額)

(単位 千円)

	日清戦争	日露戦争
臨時軍事費		
陸軍	164,520	1,283,318
海軍	35,955	225,154
計	200,476	1,508,473
一般会計臨時軍事費	32,134	96,236
臨時事件費	791	221,581
合計	233,400	1,826,290
戦争継続期間	10ヶ月	19ヶ月
1ヶ月平均支出額(A)	23,340	96,121
一般会計歳出1ヶ月平均(B)	6,511	23,088
$\frac{A}{B}$ %	373.9	415.0

(第3表) 臨時軍事費使途別内訳

(単位 百万円)

	日 清 戦 争		日 露 戦 争	
	金額	比率	金額	比率
物件費	150.6	75.1	1,170	77.6
人件費	39.4	19.7	165	11.0
諸支出金	7.3	3.7	166	11.0
機密費	0.5	0.2	4	0.2
軍政関係費	2.6	1.3	-	-
その他	0.0	0.0	4	0.2
計	200.5	100.0	1,508	100.0

(備考)『昭和財政史』第4巻、1955年、第3、4、6表より作成

(備考)『昭和財政史』第4巻、14ページより。
(出所)鈴木武雄『財政史』84頁。(表2、表3共)

ぼす影響、とりわけ当時の日本についていえば、生産と輸入に及ぼす影響が日清戦争より著しく強烈であったことを意味する⁶⁾』と述べている。

日露戦争開戦直前の1903(明治36)年11月10日、日銀副総裁兼横浜正金銀行業務監督の職にあった高橋是清は松尾臣善総裁から開戦となれば、日銀として「軍費調達に全力を注がねばならぬ」「国内の支払いは兌換券増発でともかく弁ずるとしても、軍器軍需品などにて外国より購入せねばならぬものがたくさんある」と説明を受け、外国からの軍需品の購入は正貨を要するから「今日より十分考慮画策してもらいたい」と指示を受けた⁷⁾。翌1904(明治37)年2月、国交断絶・開戦とともにロンドンに赴き、外債募集交渉に当たる。日露戦争は最初から外債頼みだった。日露戦争のための公債発行は、内国債が国庫債券5回、発行額面額合計4億7306万円余、臨時事件公債1回、1億9967万円余、外債英貨公債が4回⁸⁾、同8億56万円余で、外債依存の比重が極めて高かったことが特徴である。「この点にこそ、当時の日本資本主義の力の限界が現れていた⁹⁾」

内国債の募集はフタをあけてみると、予想された以上に順調だった。日本経済界の実力が日清戦争後、飛躍的に高まっていたことが、その背景にあると考えられる。だが、当時の日本は兵器のかなりの部分を輸入に仰いでいたため、その輸入資金としての外貨を獲得することは必然であった。

(3) 高橋是清の外債募集交渉

a) ロンドン金融市場と高橋

1904(明治37)年2月6日、日露戦争開戦が決まり(2月10日宣戦布告)、日本政府は三人の人物を欧米へ派遣することになった。対欧世論工作のための末松謙澄、対米世論工作のための金子堅太郎、そしてロンドンでの外債募集のための高橋是清であった。公債1000万英ポンド募集の命を受けた日銀副総裁高橋是清は2月24日、訪米する金子と共に横浜を出発、サンフランシスコ、シカゴ、ニューヨーク経由で3月31日、英リヴァプールに上陸、翌4月1日、ロンドンに入った。

1902(明治35)年1月には日英同盟が締結されていたし、世界の金融セ

ンターの中心であったロンドンに高橋が赴くのは当然であった。これより先、1898(明治31)年に当時、正金銀行副頭取の地位にあった高橋は井上馨蔵相から外債募集の可能性を探る密命を受け、海外支店業務指導点検の名目でイギリス、ドイツ、ベルギーを訪れている。ここで出会ったパース銀行ロンドン支店副支配人のアレクサンダー・アラン・シャンドは、横浜の「バンキング・コーポレーション・オブ・ロンドン・インデヤ・アンド・チャイナ」支配人時代に少年高橋を教えた人物であり、高橋の有力な協力者、支援者となった。ほかに、この1898年の旅行では外債募集交渉で日本の協力者となる人脈を培っている。

だが、ロンドンで高橋を待ち受けていたのは、日本政府の外債募集は絶望的とする見方だった。交渉のいきさつは『高橋是清自伝』下巻が詳しい。

例えば、3月17日にはニューヨーク滞在当時、ロンドンの横浜正金銀行支店支配人山川勇木から電報が届き、「ロンドンでは、募集の見込みはない、今日正金銀行のごときは鏹(ビタ)一文の信用もない」と書かれていた¹⁰⁾。高橋は随行した深井英五に「釘一本打って見ないで・・・」と洩らし、黙殺したという。末松も、また、駐英公使林董も公債募集を絶望視していた¹¹⁾。

パース銀行の総支配人ダンやロンドン支店長シャンドらも同様な見方で、高橋が英貨公債1000ポンドを募集するという日本政府の希望を告げたとき、「いずれも燃ゆるがごとき同情は持っているが、ただ話を聞きおくとどまり、目下の状況では日本公債の発行は容易なことではないということで、山川君の電報の真意が一層よく体験せらるばかり」¹²⁾だった。また、高橋は金融仲買人W・フート・ミッチェルから、①ロンドンの銀行家は、日本政府が1899年の第1回英貨公債発行の際、パース銀行、香港上海銀行などロンドンの発行銀行に約束した金本位制を維持できるかどうか、その能力に疑問を持っている、②民衆は初戦で日本が勝利してもロシアが最後の勝利者になるに違いないと秘かに考えている——ことがロンドンの投資家を日本の公債に引込み思案にさせている原因と聞き、4月13日付英文日記に記している¹³⁾。

しかし、高橋はシャンドらの仲介でパース銀行を軸に交渉を進め、アジ

アに活躍の場を広げていた香港上海銀行を引き入れ、4月26日、27日ごろには日本政府の希望額の半分の500万ポンドを発行する案をまとめ上げた。交渉開始当初、パリ市場でのロシア公債市況は上昇気味であるのに対して、日本の1899年発行第1回四分利付英貨公債のロンドンでの市況は、開戦前の80ポンド以上から60ポンド程度に暴落していた。このことを考え合わせれば、希望額の半分でも仕方のないところであった。¹⁴⁾

b) シフとの出会い

アメリカのユダヤ人銀行家ジェイコブ・ヘンリー・シフとの出会いは、ロンドンで苦闘する高橋、そして日本の外債募集に大きく道を開くことになり決定的な影響を与えた。シフが日本の外債を引き受けたことにより、外債発行は軌道に乗り、高橋は合計6回(表4)に及ぶ外債募集を成功させることができたのである。高橋はシフの決断への感謝の気持ちをシフの没後、英文追悼文に記しているが、「ロンドンとニューヨークで発行

(第4表) 高橋是清が担当した外債発行交渉

英貨公債	調印・募集	発行額	年利率	担保	発行目的	発行銀行・引受人
①第1回 六分利付	明治37(1904)年 5月	£1000万	6%	海関税 収入	公債整理 軍資充実	(英) パース銀行、香港上海銀行、横浜正金銀行 (米) クーン・ロエブ商会、ナショナル・シティ銀行他
②第2回 六分利付	明治37年11月	£1200万	6%	海関税 収入	軍事費	①と同じ
③第1回 四分半利付	明治38(1905)年 3月	£3000万	4.50%	煙草 専売金	軍事費	(英) パース、香港上海、横浜正金、パンミュール (米) クーン・ロエブ他
④第2回 四分半利付	明治38年 7月	£3000万	4.50%	煙草 専売金	軍事費 公債整理	(英) パース、香港上海、横浜正金 (米) クーン・ロエブ他 (独) ワールブルク商会、ドイツ銀行他
⑤第2回 四分利付	明治38年 11月	£2500万	4%	無担保	公債整理	(英) パース、香港上海、横浜正金、ロスチャイルド (米) クーン・ロエブ他 (独) ワールブルク商会、ドイツ銀行他 (仏) ロッチルド・フレール
⑥五分利付	明治40(1907)年 3月	£2300万	5%	無担保	①②整理	(英) パース、香港上海、横浜正金、ロスチャイルド (仏) ロッチルド・フレール (米、独は参加せず)

(出所) 『明治大正財政史』第12巻、50-270頁より作成。

できることになったことは、英米両国民の日本の大義に対する精神的支援を具体的な形に表したものである」と述べるとともに、シフを「正義の士」と称えている¹⁵⁾。

『高橋是清自伝』は、その出会いについて次のように記している。

「さて、右のごとくして銀行家との相談がまとまり、いよいよ仮契約を結ぶまでに運んだのが、四月二十三、四日であったと思う。しかるに偶然のことから一つの仕合せなことが起こった¹⁶⁾」

高橋がロンドンの銀行家と日本政府の希望額1000万ポンドの半額500万ポンドを発行価格93ポンド、期限7年、年6%でまとめ仮契約調印にこぎつけたのを祝い、高橋の横浜正金時代の旧友で日本に来たこともあるニューヨークの商社、スパイヤーズ社ロンドン支店長、アーサー・ヒルが5月3日晚餐会を催してくれた。この晚餐会にニューヨークのクーン・ロエブ商会首席代表、ジェイコブ・シフが招待されていた。シフは高橋の隣に座り、食事中、日本経済の現状、生産の状態、開戦後の人心などにつき細かく熱心に質問した。高橋もできるだけ丁寧に応答した。その際500万ポンドの外債募集が内定し満足しているが、日本政府からは年内1000万ポンドを募集するように申し付けられている、ロンドンの銀行家たちが「この際、500万ポンド以上は無理だというので、やむを得ぬと合意した次第」などと話した。翌5月4日、パース銀行のシャンドが高橋の元を訪れ、シフが残りの500万ポンドを自分が引き受けてアメリカで発行したいと言っている、と伝えた。高橋は喜び、日本政府の意向も確認して、話はまとまった。英米で一時に1000万ポンドの公債を発行することが出来るようになり「私は一にこれ天佑なりとして大いに喜んだ¹⁷⁾」。高橋としてはニューヨークでの外債発行を、この時点では絶望と見ていた。3月17-23日にニューヨークに滞在した際、「銀行家や資本家に当たって見てアメリカでは到底公債発行の望みはないと見込みをつけ¹⁸⁾」ていたのである。それだけにシフの申し出を「天佑」と喜び、「偶然」の引き合わせを高橋は感謝したのだろう。

しかし、シフと高橋の出会いは決して「偶然」ではなかった。シフが計画的に高橋に近づいたと考えるべきである。N. W. コーエンのシフにつ

いての最新の研究によれば、日露戦争開戦直前の1904年2月にニューヨークのシフ邸で開かれたユダヤ系アメリカ人指導者たちの集まりでシフは次のように述べたという。¹⁹⁾

「72時間以内に日本とロシアは開戦する。私は日本への資金協力を実行すべきかどうか検討している。計画を実行に移した場合、ロシア国内のユダヤ人にどのような影響を及ぼすか、皆さんの判断を伺いたい」

すでにこの年初め、シフのクーン・ロエブは日本への資金協力を検討し始めていた。セオドア・ルーズヴェルト大統領もアメリカ国内世論も日本寄りであった。会合でのユダヤ人指導者たちは日本への協力を好意的であったと推察されるとコーエンは述べている。

また、シフに対して、ロンドンのベアリング兄弟商會社主のレヴェルストック卿がニューヨークでの発行引き受けに参加するよう熱心に働きかけていた。ベアリング商會は帝政ロシア政府との関係を優先する経営戦略から高橋の交渉の際は引受けを断ったが、ニューヨーク市場の育成に関心があり、日本外債発行をその起爆剤にする意図があったといわれる。²⁰⁾

さらに、ロンドンの有力なマーチャント・バンカーであり、英国王とも親しく、シフの親友の一人であるアーネスト・カッセル卿が日本外債のニューヨーク発行についてシフの相談相手となり、日本に好意的な説明をしたこともシフの高橋への接近の背景にあったとみられる。イギリスは、日英同盟で同盟国とはいえ、日本がロシア一国と戦うときは中立の立場をとる条約の取り決めになっており、ロンドンでの日本政府の起債活動を公然と支援することは国際法上好ましくないとの意見が国内にあった。そのうえ、英王室とロシア王室は姻戚関係にあること、白人国ロシアと戦う黄色人種日本を白人国イギリスが単独で支援することはロシアに対してはばかられることなどから、アメリカを引入れ英米共同で日本を支援することを秘かに図った。このためカッセル卿が、イギリス王室、政府の意向を代弁するかたちで動いたと考えられる。²¹⁾

以上のような点からみて、シフはヒル邸の晩餐会で高橋に意図的に接触を図った、と考えるべきであろう。

II、シフと日露戦争

(1) シフの意図

イ. 経済的動機

イスラエル・ハイファ大学のダニ・グートウェイン博士は「ジェイコブ・シフが日本を支援した真の動機」と題する報告²²⁾の中で、シフは経済的動機と政治的動機の二つの動

機があったと述べている。経済的動機とは、外債引受けによって得られる直接的利益である。

第1回六分利付英貨公債の条件（発行価額は額面100ポンドに付き93ポンド半、期間7年実質利回り年

(第5表) 1904年に
ロンドンで発行された外国政府債

月	発行政府	利率 (%)	発行価格 (%)	発行時の利回り (%)
2月	エクアドル	4	68	5.88
5月	日本	6	93 1/2	6.42
5月	キューバ	5	97	5.15
6月	ギリシャ	4	84	4.76
7月	中国	5	97 1/2	5.13
11月	日本	6	90 1/2	6.63
12月	メキシコ	4	94	4.26

(出所) 鈴木俊夫論文・『日露戦争研究の新視点』98頁。

6.42%) は投資家に魅力的

で高い人気となった。(表5)の通り、日本の第1回六分利付英貨公債は、1904年にロンドンで発行された外国政府債の中でも投資家に最も有利なものであったからである。²³⁾5月11日(ニューヨークは12日)応募申し込み受付が始まったが、日本軍が韓国から鴨緑江を渡河して清の九連城と安東付近を占領する勝利の報(5月2日)にロンドンでは募集開始前に早くもプレミアムが付く人気となった。30倍の応募があり即日申込み締切りとなった。ニューヨークも12日受付開始、翌13日締切りで5倍の申込みがあった。ニューヨーク市場では同時に売り出された、当時世界最大の企業、U. S. スチールの五分利付き社債(利回りは年7%)より人気を集めた。²⁴⁾

シフが代表を務めるクーン・ロエブは、ウォール街の他の投資銀行に比べ早い段階から対外投資に積極的であった。シフが培ったイギリスやヨーロッパ大陸の金融業者との個人的つながり、人脈が対外投資のための資金と情報をクーン・ロエブにもたらしたため、とりわけ高い収益の見込

める新興国への投資に熱心であった。アメリカが帝国主義的領土拡大期に入る前の1880年代には、早くもメキシコ、カナダとの取引があり、その後、中米諸国、アジア諸国、オスマン・トルコにも投資を拡大させていた。シフは当時の多くのアメリカ人と同様、中国と日本、特にペリー提督の黒船が開国させて以来、近代化を急ぐ新興国日本に強い関心を抱いていた。シフはクーン・ロエブに入社する前の青年期、小さなブローカー、バッジ・シフ商会 (Budge, Schiff Co.) のパートナーを務めていた時代の1872年に日本の公債引き受けに参加しようとしたが失敗に終わっている。ベアリング兄弟商会の働きかけ、アーネスト・カッセル卿の助言があったとはいえ、シフが投資対象として魅力のある日本の戦時外債に引き付けられたのは銀行家として自然の成り行きであった。

シフは1904年5月から翌1905年11月まで5回の日本外債発行に参加している。その合計額は1億9600万ドルに上り、ニューヨークでは、第1次世界大戦前では前例のない空前の規模となった。鈴木俊夫教授によれば、1904年4月時点でニューヨーク証券取引所に上場されていた外国債券はフランクフルト三・五%市債と合衆国・メキシコ金貨債の二つにすぎなかった。それだけに金融史家カーロツソは、アメリカの投資銀行の発達を論じた著書でこの²⁵⁾公債の発行を「この時点までにおける最大かつ重要な発行」と評価した。

ロ. 政治的動機

シフは金融市場としてのニューヨークの地位を高める結果をもたらした。だが、経済的動機だけでは対日支援の動機を説明できないことも事実である。アメリカのユダヤ系経済人のリーダーであるシフは国内のユダヤ人差別と闘い地位向上を目指す信念の人でもあった。東ヨーロッパ諸国、特に帝政ロシアでのユダヤ人迫害は、“ポグロム (Pogrom、ユダヤ人大虐殺)”として知られ、1880年代には復活祭の季節になると毎年、年中行事のように発生した。ポグロムと帝政ロシアのユダヤ人迫害によりアメリカへの東欧からのユダヤ人移住者が激増、1880年代に20万人、1890年代に30万人、1900年から第1次大戦までの間には150万人もがアメリカ

かに渡った。とりわけ1903年、キシニョフ（Kishinev）で起きたロシア政府が扇動してのボグロムは西欧、アメリカに衝撃を与えた。アメリカのユダヤ人社会でも救援委員会が組織され、シフはユダヤ系アメリカ人を代表してセオドア・ルーズヴェルト大統領、ヘイ国務長官に書簡を送り、ロシアに対して抗議し、ロシア国内のユダヤ人に国内旅行を自由にするなどキリスト教徒と同等の権利を与えるよう促すことをアメリカ政府に求めた。²⁶⁾そして日露関係が緊迫し戦争は不可避の情勢になったとき、シフは戦争が帝政ロシアに打撃を与え、体制変革をもたらすか、悪くても、国内政治の改革が行われ、ユダヤ人迫害政策が改められるきっかけになると考えた。²⁷⁾シフは「日本は100%正しく、ロシアは100%間違っている」と宣言、「日本を助けるため、銀行家としての一線を越えた」とも評される支援に力を入れた。²⁸⁾

シフは日本外債を引受けたばかりでなく、ロシアの戦争資金調達の妨害にも動いた。シフはニューヨークの銀行家の私的会合で、クーン・ロエブとしては自分の死後も反ユダヤ主義のロシアには投融資しないことを宣言、また、自ら取締役を務めるナショナル・シティバンクの役員会で通常の3-4倍の利益が得られるロシア政府公債の引受けを拒否するよう求めた。ヨーロッパの銀行家にも資金面での対露非協力を呼びかけた。ロンドンのロスチャイルド家は、1875年以降、ロシアの公債を引受けておらず、ロンドンではユダヤ系、非ユダヤ系を問わず、ロシア公債を引受ける金融機関はない、とシフに断言した。

一方、シフの日本に対する支援は、アメリカ国内で他の金融機関に引受シンジケートへの参加を呼びかけることにとどまらず、ドイツをシンジケートに加えることを高橋に助言し、ヴァールブルク商会（Warburg & Co.）とドイツ・アジアティッシェ銀行（Deutsch-Asiatische Bank）グループを高橋に紹介した。シフの友人であるヴァールブルク商会のマックス・M・ヴァールブルクは、ドイツ銀行頭取と共にドイツ皇帝のヨットに乗り、皇帝から日本への投資を行うことにお墨付きを得て、1905年7月、11月の2回、高橋の交渉した英貨公債募集に参加している。

日本の巨額外債発行成功は全権代表としてポーツマス会談に乗り込んだ小村寿太郎外相の交渉上の強力な後ろ盾となった。一方、ロシアの全権代表のセルゲイ・ウィッテ伯は覚書で「ロシアは資力を使い果たした。国際信用は地に堕ちた。内外で公債を発行することはもはや不可能だ」とその苦渋を記していた。²⁹⁾

(2) 日露戦争後のシフと日本

日露戦争終結後もシフは、「日本の友人」「日本財政の非公式顧問」として日本支援を続けた。1906年10月のサンフランシスコ地震のあとカリフォルニアで起きた排日運動などによりギクシャクし始めた日米関係の友好維持、緊張緩和を図るため、1908年にシフはアメリカの金融・教育界のトップ40人を招いて日本政府高官のための晩餐会を開いている。また、1912年の東京市債のニューヨーク市場での発行、日本興業銀行株の海外市場での売り出しはいずれもシフから高橋に寄せられた助言にもとづくものであった。³⁰⁾

一方、南満州鉄道の権益がポーツマス条約でロシアから日本へ譲渡されたのを見て、アメリカの鉄道王、エドワード・H・ハリマンがその買収に動いたとき、シフは支援し日本に売却を働きかけている。この計画の青写真を書いたのは、1905年当時、ソウル駐在のアメリカ副領事ウィラード・ストレートで、満州など中国北部へのアメリカの投資を説いた。シベリア横断鉄道買収の野望を抱いていたハリマンはソウルを訪れたとき、ストレーターの構想を聞き関心を寄せ、中国にも深い関心を寄せていたシフに話をつないだ。シフは1908年8月31日付の書簡で高橋に「南満州鉄道への日本の投資負担を取り除く」ために、ハリマンへ売却してはどうか、と提案した。³¹⁾だが、日本は売却に同意するどころか、逆に満州への進出意欲が強く、シフの提案は不成功に終わっている。

シフの日本に寄せる好意に対して高橋や日本政府が深い感謝の気持ちを表したのは当然であった。日露戦争中の1905(明治38)年1月、日本政府は高橋の強い推挙もあり、日本の公債募集に関して「周旋尽力少なから

ず」³¹⁾として勲二等瑞宝章を授与した。さらに、講和成立後の翌1906(明治39)年、日本政府は再び勲二等旭日重光賞を明治天皇から直かに授与することをシフに通達した。シフは勲章を受けるために甥のエルンスト・H・シフ(Ernst H. Schiff)の他友人を伴い日本に向い、2月22日ニューヨーク出発、6月8日ニューヨーク帰着という約3ヵ月半の日本旅行を行った。³²⁾そして3月28日に皇居で外国民間人としては初めて明治天皇に会った。

Ⅲ、アメリカのユダヤ人リーダー

(1) シフとクーン・ロエブ商会³³⁾

ジェイコブ・ヘンリー・シフ(1847-1920)はドイツ生まれのユダヤ系アメリカ人である。ジェイコブの生まれたフランクフルトのシフ家は、14世紀に遡る家柄で、初期のシフ家は住居1棟をロスチャイルド家と共有する間柄であった。敬虔なユダヤ教徒の父とジェイコブは折り合いが悪く、1865年に18歳でアメリカへ単身、移民する。ニューヨークの小さな商社で働き始め、1870年にアメリカに帰化する。父の死で一旦、フランクフルトに戻るが、そこでクーン・ロエブ創業者、アブラハム・クーンと出会い、外国為替取引の知識を認められて1875年に投資銀行クーン・ロエブ商会に入社する。共同経営者(パートナー)のソロモン・ロエブの娘と結婚してパートナーに昇進、社内での立場を固める。ソロモン・ロエブの引退した1885年以降は事実上の経営トップとなる。設立当初のクーン・ロエブ商会は公債と鉄道債券を扱っていた。南北戦争後のアメリカ国内は鉄道建設事業が盛んで、事業資金の巨大な需要があった。このアメリカ資本主義の追い風とジェイコブ・シフのユダヤ人ネットワークを利用した経営手腕が相乗作用を生み、クーン・ロエブ商会は急成長した。時代の追い風である鉄道建設は1880年代最盛期を迎え、クーン・ロエブ商会も12以上の鉄道に資金供給した。しかし、1893年の恐慌のあと鉄道会社は経営難に陥るところが続出、モルガン商会をはじめとする投資銀行が再建・整理・統合の主導権を握った。クーン・ロエブ商会の場合、ユニオン・パシフィッ

ク鉄道買収が有名で、このとき以来シフは鉄道王、エドワード・H・ハリマンと提携する。ユニオン・パシフィック買収はシフの金融業者としての名声を高めた。19世紀末から20世紀初頭にかけてクーン・ロエブ商会はモルガン商会に次ぐ地位をウォール街に確立する。

(2) ユダヤ人ネットワーク

シフの成功の要因の一つにユダヤ人ネットワークの活用があった。³⁴⁾ ニューヨークのユダヤ人社会は1870年代には10万人を超える規模に膨れ上がっていた。ユダヤ系投資銀行の結束は固かった。クーン・ロエブ商会はグゲンハイム系鉱山会社への投融資を行っていたが、これもシフとユダヤ系のグゲンハイム家との友情によるものであった。³⁵⁾ シフは休暇とビジネスの機会を利用して、ひんぱんにヨーロッパ旅行を行い、ドイツ、イギリスの金融関係者と絆を太くしていった。シフと家族ぐるみの交際だったロンドンのアーネスト・カッセルはケルン出身のドイツ系ユダヤ人で英王室とも親しく、シフの日本外債引受け決断に大きくかかわった。ロンドンのロスチャイルド家、ハンブルグのヴァールブルク家とも交友は深かった。この交友関係の広さを利用して1870年代はアメリカの鉄道企業の発行する債券をクーン・ロエブ商会がヨーロッパの銀行などに売りさばいた。のちに流れは変わり、ヨーロッパの企業や政府が発行する債券をクーン・ロエブ商会がアメリカの投資家に売り出す役割を演じている。ヨーロッパの銀行・金融業者もクーン・ロエブ商会との取引により利益をあげた。シフはヨーロッパの銀行・金融業者にとってアメリカの政治・経済・穀物収穫高見通しなどの情報を集める上でのよきアドバイザーでもあった。

シフがクーン・ロエブ商会の経営陣を身内のユダヤ人で固めたのも自然の成り行きであった。そのうちの一人で、のちにアメリカ連邦準備制度(FRB)の理事に就任し、初期のFRBの金融政策に影響力を及ぼしたポール・ウォーバーグ(Paul Warburg)は1902年にシフの妻、セレーズの妹と結婚、クーン・ロエブ商会パートナーとなった。

(3) ユダヤ人移民支援と慈善事業

クーン・ロエブ商会の発展、ビジネスの成功と平行して、シフは1880年代初めからアメリカのユダヤ人移民の救済・差別への抗議、また、移民制限論への反対などに取り組む。これはロシアの迫害を逃れてきたものの言葉が不自由であり、差別に苦しむ新移民への支援が中心であった。

シフはその地位を利用し私財を投じてしばしばユダヤ人差別と闘った。リーディング鉄道のオーガスト・コービン社長が土地開発からユダヤ人を締め出した時(1888年)とニューヨーク＝オンタリオ・アンド・ウエスタン鉄道が反ユダヤ人のパンフレットを配布したとき(1892年)には、クーン・ロエブ商会として両社の社債売り出しに協力しないと通告し、後者の場合は、相手会社からの謝罪を勝ち取っている。

一方、この時代、ヨーロッパからシオニズム(Zionism)の運動が燃え上がったが、シフは同調しなかった。シフは1907年7月のユダヤ人集会(Jewish Chautauqua Assembly)の席上、ユダヤ人にとっての「約束の地」はアメリカであり、パレスチナではない、と述べている。「アメリカはユダヤ人の一時的な避難所ではない」とも延べ、ユダヤ人移民のアメリカ定着に力を注いだ。³⁶⁾

投資銀行家として成功し、アメリカン・ドリームを体現したシフは、信仰心の厚いユダヤ教徒であるが、上流のキリスト教徒的倫理観をもち、百万長者になっても成金的ではなく、慈善事業に積極的に取り組み、キリスト教徒を含め多くの人に尊敬されていた。³⁷⁾慈善事業では、ハーバード大学、コーネル大学、アメリカ赤十字社へ巨額の寄付をしている。

シフの移民救済事業として知られているのは、モントフィオーリ・ホーム兼病院(Montefiore Home and Hospital)、ユダヤ神学校、ヘンリー街セツルメント(福祉施設、Henry Street Settlement House)、ロルシュ男爵基金、全米ユダヤ人委員会(American Jewish Committee)などがある。シフが最も力を入れたモントフィオーリ病院は1884年にニューヨークのマンハッタンの84番街に建設された施設で難病・慢性病(ガン、結核、梅毒、麻薬中毒、

うつ病など)に悩む貧しいユダヤ人難民の病人たちのための慈善事業として始まった。ロシアからの難民の増大とともに難病、慢性病に悩む人たちはふえ続けていた。施設はのちにブロンクス地区に移転(今日のモントフィオーリ医療センター)したが、シフは1885年以降、理事長として運営に精力的に取り組んだ。1920年1月、死の8ヶ月前、シフはモントフィオーリ病院理事長を退任したが、その慰労晩餐会で理事のウィリアム・ゴールドマンはシフの慈善事業とモントフィオーリ病院への貢献を称え、アメリカのユダヤ人社会に「“シフ時代”を築いた³⁸⁾」と述べている。

(4) 帝政ロシアのユダヤ人迫害への抗議活動

シフは、日露戦争後も続く帝政ロシアのユダヤ人迫害に強い怒りを感じていた。シフはロンドンのロスチャイルド家をはじめ、サミュエル・モンタギュー卿、モーリス・ド・ヒルシュ男爵などヨーロッパのユダヤ人指導者ネットワークにも抗議活動を呼びかけた。バルカン半島、モロッコ、パレスチナのユダヤ人弾圧にも目を向けた。財力ではロスチャイルド家より下であってもシフの発言力、影響力は勝るとも劣らないものであった。³⁹⁾

日露戦争中のロシアの戦時公債募集への非協力の呼びかけは、その抗議活動の第一歩ともいえる。ロシア側には戦時資金調達という切迫した現実の前にシフのロシア向けローン“ボイコット”運動を封じ込めたいとの思惑があった。1904年、フォン・プレーヴェ(von Plehve)内相がシフに協議を申し入れてきた。シフは外国のユダヤ人向け出入国ヴィザ(査証)制限の撤廃を求めた。外国人向けヴィザが撤廃されれば、ロシア国内のユダヤ系国民の自由な旅行を禁じた政策も維持できなくなるだろうとの読みだった。申入れより数週間後、プレーヴェは暗殺された。

その後も、帝政ロシアはシフの義弟、アイザック・セリグマンの遠縁で当時、駐米ロシア大使館金融担当アタッシュを務めていたユダヤ系ロシア人、グレゴリー・ウィレンキンを通じて、アメリカ市場での資金調達への協力を求めシフに接近した。シフは「ロシアはユダヤ人に対する野蛮な政策によってアメリカ国民の好意とアメリカ金融市場を失った」と答え

ている。⁴⁰⁾また、1905年夏、ポーツマス会議にロシアの全権代表として出席するヴィッテ蔵相とアメリカのユダヤ人代表との会合が開かれたときには、シフも5人のユダヤ系アメリカ人代表の一人として出席し、「ロシアがユダヤ系国民の正当な権利を拒み続ければ、アメリカ国民のロシアに対する好意は大きく損なわれることになる」と持論を展開した。ヴィッテ全権代表もアメリカ国内の対露感情悪化を懸念し、ユダヤ人政策の改善を約束せざるをえなかった。⁴¹⁾また、シフはアメリカ政府にも、帝政ロシアにユダヤ政策見直しを促すために、1832年調印された米露通商条約の廃棄を求めた。条約は両国民の相手国との貿易、相互訪問を保障していたが、1875年ごろから帝政ロシアがユダヤ系アメリカ人の入国を制限し、査証発給を拒むようになった。シフは全米ユダヤ人委員会（AJC）を通して、条約廃棄を求める一大キャンペーンを展開した。キャンペーンは議会を動かし、1911年12月、アメリカはロシアに廃棄を通告した。⁴²⁾

ロシアはシフに対する怒りを隠さなかった。1911年にロシア蔵相は「ロシア政府はあのユダヤ人、シフがロシアに行ったことを決して忘れないし、許さない。シフが一人で日本のアメリカでの資金調達を可能にした。シフはロシアにとって最も危険な外国人の一人である」と外国人ジャーナリストに語っている。⁴³⁾

1917年3月、ロシアで3月革命が起こり帝政が倒れるとシフは喜んだ。シフはケレンスキー政権を支持し、ケレンスキー政権が発行する公債のうち100万ルーブルの引き受けを約束した。⁴⁴⁾

日露戦争時には、ジョージ・ケナンが日本国内の収容所に収容されているロシア人捕虜に帰国後の蜂起を促す革命の宣伝文を秘かに配布したとき、シフはケナンと連絡をとり、その作戦を助けている。⁴⁵⁾1917年11月、ボリシェビキによる11月革命が起きると、ボリシェビキの中にトロッキーなどユダヤ人指導者がいたため、「ユダヤ人＝ボリシェビキ」とする見方が欧米で強まり、「ユダヤ人は資本主義、キリスト教国を転覆しようとしている」という“ユダヤ陰謀説”が広まった。この結果、「帝政ロシア＝反ユダヤ主義」ととらえて“反ユダヤ主義戦争”を展開してきたシフたちに

逆風が吹きつけることになった。シフはボリシェビキには反対であった。⁴⁶⁾しかし、反ユダヤ主義の自動車王、ヘンリー・フォードは自らの支配下にある新聞、ディアボーン・インデペンデントで繰返し、「シフはボリシェビキに資金を供給した」と攻撃した。⁴⁷⁾

おわりに

ロシア国内のユダヤ人迫害は同胞愛に燃えるシフを帝政ロシアとの長い戦いに突き進ませた。だが、帝政ロシアが倒れた喜びもつかの間、シフはロシアの反ユダヤ主義の終わりが来たのではないことを覚った。逆に「ユダヤ陰謀説」の登場でシフは、反ユダヤ主義勢力の標的となり苦しむ。

一方、日本との関係では、日本が帝政ロシアと1910年、満州の特殊權益を守るために第二次日露協約を結んだときシフは激怒した。日本のやり方は裏切りではないとしても忘恩行為だと受けとめたからである。「日本が人類の敵ロシアと手を握るとは・・・ひどくくやしい思いがする」と述べている。⁴⁸⁾しかし、高橋との友情にひびが入ったり、日本への思いが大きく変わったわけではなかった。むしろ、その後の日本の中国進出に対しては、中国が安定すると理解を示すほどであった。

1922(大正11)年9月1日の関東大震災で、日本は震災後復旧のため再びニューヨークでの外債発行を計画する。この時、井上準之助蔵相はクーン・ロエブ商会ではなく、ライバルのモルガン商会を交渉相手に選んだ。第一次大戦でアメリカ国内に反ドイツ感情が高まり、シフらドイツ系ユダヤ人移民が経営するクーン・ロエブ商会の影響に陰りがさしていたからであるが、井上の高橋への対抗心があったからともいわれる。しかし、日本政府のシフに対する感謝の念がそれで消えたことを意味するわけではなかった。旧大蔵省の歴代の財務官はニューヨークのシフ家の墓に詣で感謝の祈りを捧げるのが習いだったといわれている。⁴⁹⁾

注

- 1) 高橋是清、上塚司編『高橋是清自伝』下巻、中公文庫、1976年、205-206頁。
- 2) Naomi W. Cohen, *JACOB H. SCHIFF*, New England : Brandeis University Press, 1999.
- 3) 明治財史編纂会『明治財政史』第8巻、丸善、明治37年12月、1頁。
- 4) 佐藤進参考人(当時武蔵大学助教授)の衆院大蔵委員会意見。1985年11月4日。明治天皇は日清戦争講和会議の際、新たに蔵相に任命した松方正義に対して「戦後経営の基本は、財政基盤を確立するため財政整理を優先させ、外国債を起さず内国債のみで弁償するよう配慮されることが肝要である、とのお考えである。外債を起す弊害は、先年のグラント將軍による意見言上にも見られる通り、国家の不利益たるは論議を待たず明らか故、此の辺深く注意されるように」と侍従長徳大寺実則を通じて伝えた。グラント將軍は大統領退任後の1979(明治12)年、来日し、天皇と会談した。その席で將軍はヨーロッパ先進国のアジア侵略の暴虐に触れ、とくに外国資本の侵略性に注意し、これに頼るべからずと忠告したという。(藤村欣市『高橋是清と国際金融』上巻、福武書店、1992年、28頁)
- 5) 鈴木武雄『財政史』東洋経済新報社、1962年、82頁。
- 6) 鈴木武雄前掲書、85頁。
- 7) 高橋前掲書、179頁。
- 8) 軍事費としては4回の外債発行であるが、これらの外債を整理するための外債も発行されている。(表4)「高橋是清が担当した外債発行交渉」参照。
- 9) 鈴木武雄前掲書、87頁。
- 10) 高橋前掲書、193頁。
- 11) 藤村欽市『高橋是清と国際金融』上巻、福武書店、1992年、99-101頁。
- 12) 高橋前掲書、194頁。
- 13) 藤村前掲書、103-104頁。
- 14) 高橋前掲書、199頁。
- 15) Cyrus Adler and Mortimer L. Schiff, *Jacob H. Schiff : His Life and Letters Part I*, Garden City, NY : Doubleday, Doran and Co. 1928 pp.216-217.

- 16) 高橋前掲書、203頁。
- 17) 高橋前掲書、204-205頁。
- 18) 高橋前掲書、211頁。
- 19) Cohen, *op.cit.*, p.134.
- 20) 鈴木俊夫「日露戦時公債発行とロンドン金融市場」、日露戦争研究会編『日露戦争研究の新視点』成文社、2005年、84-103頁。
- 21) 高橋前掲書、205頁。
- 22) Dani Gutwein, “Jacob Schiff and his true motive in helping Japan”, THE RUSSO-JAPANESE WAR & THE 20TH CENTURY : An International Conference, Feb. 9-13, 2003, Israel.
- 23) 鈴木俊夫前掲論文、97-98頁。
- 24) 大蔵省編纂『明治大正財政史』第12巻、経済往来社、昭和31年、76-77頁。
- 25) 鈴木俊夫前掲論文、95頁。
- 26) Cohen, *op.cit.*, p.132.
- 27) 高橋自伝、下巻、210-213頁。
- 28) Cohen, *op.cit.*, pp.134-135.
- 29) Adler/M. Schiff, *op.cit.*, p.226.
- 30) Adler/M. Schiff, *op.cit.*, p.229. 東京市債はアジア諸国の地方自治体のニューヨーク市場起債第1号であった。
- 31) Adler/M. Schiff, *op.cit.*, p.247.
- 32) シフの日本旅行に関しては、Jacob H. Schiff, *Our Journey To Japan*, NY : The New York Co-operative Society, 1906が詳しい。同書はシフ夫人がシフの家族への手紙をもとに編纂したもので、シフの60歳の誕生祝として贈った。和紙に印刷された珍しい私家版の書物。松村正義「日露戦争後の高橋是清とヤコブ・シフ」『国際関係研究』（2002年）を参照。
- 33) クーン・ロエブ商会 (Kuhn, Loeb & Co.)。ニューヨークの投資銀行。1867年、ドイツ系ユダヤ人移民のエイブラハム・クーンとその遠縁のいとこで、ドイツ系ユダヤ人移民のソロモン・ロエブの二人が設立した。1977年、投資銀行リーマン・ブラザーズ (Lehman Brothers) に買収された。

- 34) イギリスの経済史家、バリー・サップル教授は雑誌評論で「ニューヨークのドイツ系ユダヤ人投資銀行の成功は縁故関係と結末の賜物である」と述べている。Barry E. Supple, "A Business Elite," *Business History Review* 31 (summer 1957) : pp. 143-178.
- 35) Cohen, *op.cit.*, p.6.
- 36) Cohen, *op.cit.*, pp.179-180.
- 37) Cohen, *op.cit.*, p.8.
- 38) William Goldman, "The Schiff Era In Jewish Philanthropy", Jan.3,1920. *American Jewish Historical Society, document #CT275, S3442G5*, pp. 1-4.
- 39) Cohen, *op.cit.*, pp.46-47.
- 40) Cohen, *op.cit.*, p.136.
- 41) Cohen, *op.cit.*, pp.137-138.
- 42) Cohen, *op.cit.*, pp.150-151.
- 43) Cohen, *op.cit.*, p.134.
- 44) Cyrus Adler, *JACOB HENRY SCHIFF, A Biographical Sketch*, NY. : The American Jewish Committee, 1921, pp.19-20.

シフは1917年11月の11月革命の後、この100万ルーブル相当額を不良債権として償却した。(Cohen, *op.cit.*, p.242.)

- 45) Cohen, *op.cit.*, p.137.
- ジョージ・ケナンについては、井上ラウラ「ジョージ・ケナンと日露戦争」(日露戦争研究会編前掲書、203-213頁)を参照。
- 46) Adler, *op.cit.*, p.20.
- 47) Cohen, *op.cit.*, p.245.
- 48) Cohen, *op.cit.*, p.38.
- 49) Adler, *op.cit.*, pp.15-16.

津島寿一『芳塘随想』(芳塘刊行会)にも同様な記述がある。

(本稿は2005年6月5日、京都大学で開かれたアメリカ学会第39回年次大会分科会「日露戦争とアメリカ」での報告をもとに加筆した。松村正義・日露戦争研究会会長にご教示いただいたことを感謝して記す)